

2026年度

国府台女子学院 中学部

第2回入試

国語 (50分)

【注意】

1. この問題は、「始め」の合図があるまで開いてはいけません。
2. 問題を読むときに、声を出してはいけません。
3. 印刷が不鮮明ふせんめいでわからない場合や、その他わからないことがあった場合には、
だまって手をあげ、先生にたずねてください。
4. 答えは、すべて別紙解答用紙に記入してください。

注意 Ⅱ句読点や記号もそれぞれ一字と数えます。

□ 次の各問題に答えなさい。

問一 次の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字の読みはひらがなで答えなさい。

- ① セツジツな要求。
- ② 主人公のシンシヨウ風景を表現する。
- ③ リタ的な生き方をする彼女。
- ④ コウガク心に燃える。
- ⑤ その土地の名家。

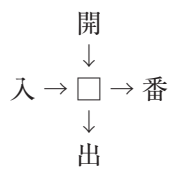
問二 次の敬語を使った表現について、正しければ○を、間違っている場合は正しく全文を書き直しなさい。

いつも楽しく拝見しております。

問三 次の——線部の語について、正しければ○を、間違っている場合は——線部の一部を使った適切な語を答えなさい。

あんなひどい反則をするなんて、スポーツ選手の風下にも置けないやつだ。

問四 矢印の向きにしたがって読むと二字熟語ができるように、□にあてはまる漢字一字を答えなさい。



問五 「マーク」の意味としてふさわしくないものを、次のア～エから一つ選び記号で答えなさい。

- ア 記号
- イ 目印
- ウ 暗号
- エ 注意

問六 次の漢字の一部は、前の漢字と同じものとなっています（へんやつくりの部分によって形が変わっている場合があります）。□に入る適切な漢字を答えなさい。

点—熱—□—勉—逸

問七 次の説明を読み、()に当てはまる適語をあとのア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

「()のつまり」とは、鱚はらが幼魚から成魚になるにしたがってその名称めいしよを変え、最後に「()」になるところからできたことばです。「結局」「行きつくところ」の意味で用いられます。

- ア さば
- イ とど
- ウ ぼら
- エ たら
- オ どん

問八 次の(Ⅰ)(Ⅱ)内に入る漢字に共通している部首を書き出しなさい。

「(I) 聞は一見に如かず」だ。さあ、君も参加してみよう。
大会で好成績を残した彼女はどこに行っても注目の (II) だ。

問九 次の文が説明している語をひらがなで答えなさい。

もともとは犯罪者仲間などの社会で、身辺が危ない意味で使われていた言葉。多く望ましくないことについて言う語だが、最近は若者の間で感動詞のように使われたり、プラスの評価にも用いられる傾向がある。

問十 「スマホ」は「スマートフォン」を省略した言い方です。このように、

本来の言葉を短く切ったり、短くしてつなげたりした言葉が多く存在しますが、省略した言葉ではないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア バイト イ 弁当 ウ 短大 エ サブスク

問十一 「しおらしい」という言葉を使って二十字以上三十字以内で短文を作りなさい。話を通じれば主語がなくてもかまいません。

〔三〕 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「今度の日曜日、あたしのお誕生会やるから、みんな来てね」
と、好恵からの誘いを受けたのは、まだ四年生も□^①についていない六月のことだった。

誕生会は私たちのビッグイベントだ。グループの誰かが誕生日を迎えるたび、私たちはその誕生会に必ず出席し、自分のときにもグループ全員を招待する。それが仲間内の不文律となっていたから、好恵が誕生会を開くのもごく当然のことだった。

にもかかわらず、好恵からの招待を受けた私たち五人は、そろって「あれ」というふうに黙りこんでしまった。今年も好恵の誕生会はないのではないかと、思っていたからだ。

一年前の六月十日、真っ先に九歳を迎えた春子に次いで、当然、開かれるものと思っていた好恵の誕生会は、「お母さんが病気になったから」の一言でお流れとなった。私たちはしかたなしにプレゼントだけを渡して□^②を濁したけれど、ケーキもごちそうもプレゼントのお返しもない誕生日はひどく味気なかった。

「おばさんの病気、治ったんだね」

「好恵んちのおばさん、電話に出るとちよつと怖いけど、でも良かったよね、お誕生会できて」

「うん、うん。プレゼントあげるだけじゃ、いったい何のためのお誕生会かわかんないもんね」

「おいおい、何のためだよー」

今年も捨ててかかっていた誕生会の復活に、私たち五人は胸をときめかせた。お誕生会。その響きだけで無条件に高揚できた年頃だ。そしてその高揚

はプレゼントの買い出しで絶頂を迎えることになる。

田畑が地面の大方を占め、空には農薬散布のヘリコプターが年中舞っていた私たちの町では、その手の買い物をするなら小学校の裏にある青葉堂か、やや離れたたんぼぼ文具店と相場が決まっていた。青葉堂は学用品が中心でサンリオなどのファンシー系に弱いため、私たち五人は土曜日の放課後、そろってたんぼぼ文具店まで足を延ばした。

パティ&ジミーの新作や、匂いつきの消しゴムなどに心を奪われつつ、ああだこうだと言いつつながらプレゼントを厳選する。それは至福の一時だ。私はあのとき何を買ったのか記憶にないけれど、一人最後まで迷っていた須田さんが絞りこみに失敗して千円近くファンパツするはめになったのを憶えている。かわいいカバーに入ったミニ色鉛筆やメモ帳などの豪華セット。そこだけ鮮明によりがえるのは、自分も欲しかったからだろう。

色とりどりのリボンをかけた包みを抱え、私たちは満ち足りて家路について。そして一夜明けた翌日、再びその包みを手に、初めて好恵の家を訪ねた。

町外れの坂上に建つその家は、原色に近い屋根のブルーと外壁のオフホワイトが一見洋風で、当時よく耳にした「モダン」という言葉がよく似合った。軒先には二台の自転車が整然と、ブロック塀に並行してきつちりと停められていて、庭のプランターの配列にも乱れがない。当然のように家の中もすっきり整頓されていたものの、しかし、そこは誕生会の会場にはあまりにもすっきりしすぎている。

色鮮やかな飾りの施されたリビングを期待していた私たちが通されたのは、玄関わきの階段を上った好恵の部屋で、そこには楽しい会を思わせる装飾のひとつもなければ、ごちそうの匂いもなかったのだ。「あらあらみんな、今日はどうもありがとうねえ」と、甘い声で出迎えてくれるおばさんの姿もない。

どうもおかしい。ごちそうのために朝食を抜いてノゾんだ私たちは、もじもじと顔を見合わせた。まさか。そんな。いや、バカな。困惑を隠せない私たちの中で、好恵だけがただ一人、普段以上にニコニコと嬉しそうにはしゃいでいた。

リーダー格の春子がしびれを切らしたように「プレゼント」と声を上げたのは、ただ好恵のおしゃべりをきくだけで一時間近くが経過した頃だ。

「そろそろプレゼント、渡そうよ」

この場に展開をもたらすことで、パーティーの始まりをうながすような言い方だった。

「うん、そうだね」

「プレゼント、プレゼント」

「お誕生会だもんね」

しかし、私たちが次々にプレゼントを渡し、そのたびに好恵が歓声を上げて、とうとう最後の包みが開かれても、ケーキとごちそうは依然として姿を現さなかった。

「好恵、ちよっと」

階段の下からおばさんの声したのは、すっかり無口になった私たちに、さすがの好恵も言葉少なになった二時すぎのこと。その少し前に玄関の戸が軋む音をきいたから、おばさんは私たちへのお返しでも買いに出ているのかもしれない、とにわかに希望が射してきた。が、それもほんのつかの間にすぎなかった。

「ちよっと待ってて」と階段を下りていった好恵は、数分後、ごちそうのお皿一つ運んでくるでもなく、ただ赤い目をして戻ってきたのだ。

「好恵、どうした」

「なんかあったの」

私たちが何をきいても答えず、戸口に立ちつくしたまま泣きそうな顔をしている。代わりにその答えを私たちに告げたのは、少し遅れて階段を上ってきた好恵のおばさんだった。

「うちはね、誕生会はやらないことになってるの。お姉ちゃんも、弟も。だから、好恵が何言ったか知らないけど、今日は帰ってね」

帰ってね。

私たちの一人一人を見回しながら、確かにおばさんはそう言った。

窓からの明々とした陽を浴びていたみんなの顔が、瞬時に二層、5。

誕生会では歓迎されるのが当然の権利と考えていた私たちは、この唐突な拒絶の受けとめかたがわからずに静まり返った。くう、と誰かのお腹が鳴っても、いつものような忍び笑いはきこえず、その音はただ虚しく宙に浮いたきりだった。

やがておばさんが低いため息とともに階下へ消えると、好恵は泣き顔を隠すように襖をへだてたと成りの部屋へ閉じこもり、残された私たちも床に散ったリボンを踏みながらその部屋を出て、さっさと家に帰った。

当時の日本は今とはちがいがい、まだ貧富の差というものが子供の目にも露わに見え隠れしていた。それはクラスメイトたちの身なりにも、授業参観に訪れる母親たちのそれにも、時折持参するお弁当の中身にもうかがえた。けれど子供の世界には暗黙のルールがあり、肉体的な欠点がからかいの的になることはあっても、貧しさが槍玉にあがることはなかったように思う。

もしも好恵が貧しきの片鱗でも垣間見せていたら、だから私たちは意外と簡単にこの一件を忘れていたかもしれない。

しかし、好恵は誰がどう見ても普通の家の子だった。どちらかといえば恵まれてるほうで、『りぼん』と『なかよし』は毎月二冊とも買っていたし、

洋服もお姉さんのおさがりよりは新品が多く、ウエストがゴムになっているスカートが流行ったときにもいち早く手に入れて、ゴムを引つ張る男子たちとじゃれあっていた。

その好恵の家に「誕生会だから」と招かれ、私たちはA プレゼントを持参した。しかしそこにはケーキもごちそうもお菓子もなく、もちろんプレゼントのお返しもなかった。しまいには「帰れ」とおばさんに追い払われて帰ってきた。

冗談じゃない！

と、私たちが激昂したのも無理はなかったと思う。子供心にもそれはあまりに道理の通らない話だったのだ。

「あたし、こんなクツジヨク受けたのって、初めて。ごはんも食べないで帰ってきたなんて、ばっかみたい。お母さんに言っちゃろ」

「あのクソババア、帰れ、だつてさ。うちは誕生会やらないの、だつて。だつたら最初から呼ぶなよな」

「あーあ。プレゼント損した」

「お腹すいた」

「行くんじゃないかった」

空腹が私たちの怒りに拍車をかけた。中でも一番むきになっていたのは、普段はおとなしい須田さんで、彼女はうつすら涙さえ溜めていた。

「あんなに買うんじゃないかった……。もうお小遣い、すかんぴんなのに」
⑧ 子供の世界はある面、大人の世界よりも残酷で手厳しい。融通がきかないだけに他人を許せず、怒りも喜びもストレートなぶん、その矢はまっすぐ突き刺さる。

「「だいたいさ、好恵は去年もプレゼントだけ取ってっただよ。今年も初めからそのつもりだったんだよ。あの子、結構、がめついから」

「好恵、男子からでもいいプレゼントもらってたくせにね。もうすぐあたしの誕生日日って言いまわってさ」

「男子もバカだよ。なんであんな女に引つかかるかな」

次第に方向を変えて過熱していく好恵の悪口。そこには日頃からの鬱屈したジェラシーもひそんでいたはずだ。何かとメザワリな好恵を攻撃するための糸口を、私たちははずつと探していたのかもしれない。

興奮冷めやらぬままみんなと別れた私は、家に帰るなり、おさまりのつかない怒りを母にぶちまけた。

「ねえねえ、きいてよ、好恵つてばさあ」

事の次第を知った母は難しい顔をして、「紀子の気持ちはわかるけど、好恵ちゃんの気持ちも考えてあげなさい。このことは誰にも言っちゃダメよ」と釘をさした。私は「わかった」とうなずき、食器棚にあった菓子パンを嚙りながら階上の姉の部屋を訪ねると、再び怒りをぶちまけた。

その頃はまだコードレスフォンなんてものもなく、電話とは一家に一台、家族の集う部屋の電話台に鎮座しているものだったから、こっそり友達に電話できないのが残念だったものの、姉の部屋で菓子パンを平らげた私は、裏の通りにクラスメイトの女子が住んでいることを思い出した。さほど仲は良くないが、まあこの際、誰でもいい。私はすぐさまその子の家を訪ね、心ゆくまで怒りをぶちまけた。

食べものの恨みとは本当に恐ろしい。

この日、そうして鬱憤を晴らしたのは私だけでなく、グループの五人が全員、友達に電話をしたり会いに行ったりと似たような行為に走っていたのだ。

結果、その翌日の四年三組に誕生会の一件を知らない者はいなかった。

ここに一つの誤算がある。

私たちは好恵の悪口を言いふらすことで、彼女の評判を貶め、クラスのみんなを味方につけようともくろんでいた。そこには、願わくば好恵を仲間外れにしてやりたいという悪意もひそんでいただろう。しかし、みんなは私たちの話をきいても、当然ながら私たちほど腹を立てず、それどころかむしろ好恵に同情的だったのだ。誕生会でプレゼントをあげたのに何も食べさせてもらえず追いつ返された五人より、意地悪なお母さんに誕生会をしてもらえない一人のほうが、第三者の目には遥かに不憫に映るらしい。私たちがどんなに空腹だったかを熱弁しても、それは彼らの⑪をくすぐるに及ばず、彼らの哀れみは涙を浮かべて耐えていた好恵一人に集中した。

しかも、相手は普段、人一倍にぎやかな好恵である。いつもは元気な女の子の意外な側面。それは男子たちの好恵熱をより一層煽りたて、好恵を嫌っていた女子たちの態度をも軟化させた。

私たちの撒き散らした中傷は、帰するところ好恵から何も奪えず、かえって彼女に欠けていた何かを埋めて終わったのだ。

完敗だった。世論に敗れた私たちは、再び好恵を受け入れるしかなかった。クラス中を敵にまわさないためには、誕生会のことは⑬に流したふりをして、以前と変わらぬ関係が続けるほかはない。

私たちが涙をのんで何事もなかったようにふるまうと、数日間はおとなしくしていた好恵もそれに倣い、以前と変わらぬ彼女に戻った。そうして四年三組には以前の均衡が戻り、「好恵のお母さんは継母」だの「遊び好きで料理もしない鬼母」だのという学級伝説を残して、誕生会の一件は静かに忘れ去られようとしていた。

忘れなかったのは、ごちそうを食べそこなった上、クラスの男子から「食意地の張った五人」のレッテルを貼られた私たちだけである。上っ面の笑

顔とは裏腹に、不満を抱えたまま和解を強いられた私たちの、胸の暗部に巣くう好恵への憎悪は日増しに募っていった。

私たちは好恵を許さなかった。

そこで、ひそやかな復讐を企てた。

「好恵とは一応、仲良くする。でも、もう私たちのお誕生会には呼ばない。お誕生会の恨みはお誕生会で返すべきだし、それに、休日のパーティーまではクラスメイトの目も届かないでしょ」

最初、春子がこの復讐案を口にしたとき、私はなんとという妙案だろうとすっかり感心した。誕生会の恨みを誕生会で返すというのは確かに道理にかなっているし、あれだけのことをされたのだからこれくらいはして当然と、私たちは全員一致で好恵を今後の誕生会から閉め出すことを決議した。

自分のうかつさに思い至ったのは、その決議から数日が流れてからのことだ。

私は肝心なことを忘れていた。

グループで二番目に十歳を迎えた好恵に続く、三番目の十歳。

好恵に最初に手を下すいやな役まわり……。

そう、私は三週間後に誕生日を控えていたのだ。

七月八日。七夕の翌日にあたる私の誕生日は日曜日だった。この年も織姫と彦星は逢いびきを果たせず、母は朝から窓辺に垂らしていた笹を片付けると、代わりに折り紙や紙テープで居間を彩った。すでにごちそうの下準備は整えられ、冷蔵庫には子供心をそそる食材がばんばんに詰まっている。中でもひときわ目を引いたのは、『HAPPY BIRTHDAY NORIKO』とホワイトチョコで描かれた手作りのチョコレートケーキだ。食器棚にはお

菓子の数々もスタンバイされていて、中には普段あまり食べさせてもらえない体に悪そうなものもある。これがいつもの誕生日なら、私は幸福度一二〇パーセントで宙に浮いていたことだろう。

しかし、私は疲れきっていた。

好恵を誕生会からしめだすことに決めたあの日から三週間、私は人の視線とはこんなにも怖いものかと思うくらい知らされながら過ごした。いつ、好恵に誕生会のことをきかれるのか。いつ、好恵は自分が誕生会に招かれなことを悟るのか。私は絶えず B 好恵の視線ばかりを気にしていたのだ。

好恵に「おはよう」と声をかけられるだけで、私は招待状の催促でもされたように顔を赤くした。会話の途中で沈黙が訪れるたび、「ところで、紀ちゃんのお誕生会だけ……」と切りだされるのではないかと C した。毎日が緊張の連続。七月八日が近づくほどにその緊張は高まっていった。

これほど自分が小心者とは知らなかった。復讐がこれほどの苦痛を伴うものとも知らなかった。ついに誕生日を迎えたその日、だから私は誕生会やプレゼントの喜びより、ようやくその苦痛から解放される喜びのほうが大きかったのだ。

誕生会は滞りなく進んで、終わったと思う。もともと滞りなど起こりようもないパーティーだ。まずはケーキの蝋燭に火を灯し、部屋を暗くして「ハッピー・バースデー・ツー・ユー」の合唱。それから十の炎を吹き消し、パチパチと拍手。再び部屋に明かりが灯り、みんなからプレゼントをもらって、ようやくごちそう。皿の空いた座卓にはお菓子が並び、そのあまりは夕方、母がちり紙にくるんでプレゼントのお返しとともに配る。お決まりの儀式。この段取りさえ押さえればまず失敗はない。なのに好恵はそれすらもしてもらえなかった。好恵の十歳の誕生日にはケーキもなかったのだ。

みんなの帰った後、急にがらんとした部屋の中で、私は一気に脱力した。もらったプレゼントをしまうのも億劫で、その場に散らかしたまま二階へ上がる、部屋のベッドにどてつとつつぶした。甘いケーキの味はどうに忘れ、苦い後味ばかりが残っていた。

一生に一度しかない十歳の誕生日。

もう永遠に取り戻せない特別な一日。

好恵はあの日、どんな思いで十代への第一歩を踏みだしたんだろう。

そして今日はどこで何を思い、過ごしていたんだろう。

誕生会の終了と同時に、私はこの胸のもやもやから解放されるはずだった。なのにもやもやは増す一方で、^{まぶた}瞼の裏に焼きついた好恵の視線はなおも私を苦しめる。ついてない、と心底思った。私の誕生会が七月八日でなかったら、秋や冬の終わりのほうだったら、私は例年通りに何も考えず楽しい一日を過ごしていたはずだ。一年で一番幸せな一日。なのに、好恵の次に生まれたばかりにすべてがだいなしになってしまった。ついてない。ついてない。ついてない……。

「紀ちゃん」

と、そのとき、襖のむこうから姉の声がした。

入るよ、とノックもせずに現れた姉は、ベッドに伏せた私のもとへずかずかと歩みより、黄色いリボンのかかったたんぼ文具店の包みを差し出した。「今、家の前であんたの友達みたいな子に会ってさ。これ、あんたに渡してっ」

「え」

「直接渡せばって言ったら、自転車に乗っていっちゃった」

私は声もなくその包みを受けとった。姉が去ってからリボンをほぐくと、包装紙にくるまれていたのは須田さん並みに豪華なサンリオ商品のセット

だった。私の好きなリトルツインスターのメモ帳もある。

「……………」

気がつく、足が勝手に私を運んでいた。私は階段を駆け下りて玄関をくぐりぬけ、庭先の自転車に飛び乗った。

⑮ 自転車は私を好恵の家へ運んだ。

⑮ 風も、地面も、すべてが私をそこへ運んでいく気がした。

(森絵都『永遠の出口』 集英社)

問一 —— 線部 a ~ d の漢字の読みをひらがなで書き、カタカナを漢字に直しなさい。

問二 —— 線部 ①、②、③の に入ることばとして最も適当なものを次のア ~ コからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア	水	イ	柶 ^か	ウ	板	エ	お茶	オ	言葉
カ	鼻	キ	目	ク	口	ケ	川	コ	人目

問三 —— 線部 ③「まさか。そんな。いや。バカな。」とありますが、ここに続く言葉を本文中の内容を参考にして、二十字以上三十字以内で答えなさい。

問四 —— 線部 ④「好恵だけがただ一人、普段以上にニコニコと嬉しそうにしゃいでいた。」とありますが、この時の態度からうかがえる好恵の心情に合わないものを次のア ~ エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 去年できなかった誕生日会を開くことができたので、わざわざ皆が家に来てくれたこの楽しい時間がずっと続いてほしい。

イ 誕生日会はやらないことになっているが、友達を呼んでしまったので、いつも以上に盛り上げなくてはいけない。

ウ 母の許可なく勝手に自分の誕生日会を開いてしまったので、母に叱られるかもしれない不安な気持ちを隠したい。

エ 友達を呼んでしまえば母がごちそうを用意してくれるはずだと確信し、誕生日会を開けた嬉しさがこみ上げてきている。

問五 波線部「激昂した」という心情表現を参考にして⑤に入る言葉として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 青く変わった イ 白く変わった

ウ 赤く染まった エ 黄色く染まった

問六 ——線部⑥「暗黙のルール」と同じ意味を表す語を本文中より探し、三字で書き抜いて答えなさい。

問七 ——線部⑦「好恵が貧しさの片鱗でも垣間見せていたら、だから私は意外と簡単にこの一件を忘れていたかもしれない」とありますが、なぜですか。文中の言葉を使って三十字以上四十字以内で答えなさい。

問八 A C に入ることはとして最も適当なものを次のア～カからそれぞれ選び、それぞれ記号で答えなさい。(なお、使える記号はそれぞれ一度きりとしてます)

ア さつさと イ いそいそと ウ おそろおそろ

エ どぎまぎ オ びくびくと カ ずかずか

問九 ——線部⑧「子供の世界はある面、大人の世界よりも残酷で手厳しい」とありますが、最終的にそれによってどのようなことが起こりましたか。それが最も象徴的に描かれた部分を「 」の中から一文で探し、初めの五字を書きなさい。

問十 ——線部⑨「『このことは誰にも言っちゃだめよ』と釘をさした。」とありますが、母はなぜこんなことを言ったのですか。最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア この出来事を皆に言うことにより、娘である紀子の立場が悪くなる
と思つて心配だったから。

イ 好恵の意思ではどうにもならないことで周囲から責められる事がな
いよう慮ったから。

ウ 好恵の間違った行為に対し、本人が反省している様子がうかがえる
ので、許してあげたかったから。

エ 娘の紀子が人の悪口を言つて好恵を貶めるような人間になつてしま
わないかと心配だったから。

問十一 ——線部⑩「誤算」とありますが、ここに関わる内容として適当ではないものを次のア～エより一つ選び、記号で答えなさい。

ア 好恵を仲間外れにできなかったこと

イ 好恵より自分たちのほうが非難の対象になったこと

ウ クラスのみんなを味方にできなかったこと

エ 大人しくしていた好恵が数日で以前と変わらない態度に戻ったこと

問十二 ⑪には「胸の奥に秘められた、感動し共鳴する微妙な心情」

の意味を表す言葉が入ります。次の中から最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 金線 イ 琴線 ウ 感銘
エ 脇腹 オ 感嘆

問十三 ——線部⑫「彼女に欠けていた何か」とは何ですか。最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 困難にたえる我慢強さと女子からの憧れ
イ 周囲を気遣うデリカシーと女子からの共感
ウ 他人の言葉に気にする繊細さと女子からの信頼
エ 同情を集めるキャラクターと女子からの好意

問十四 ——線部⑬「この年も織り姫と彦星は逢いびきを果たせず」とありますが、これは一般的に考えるとどういうことを示しますか。「～こと」に続く形で五字以内で答えなさい。

問十五 ——線部⑭「風も、地面も、すべてが私をそこへ運んでいく気がした。」とありますが、紀子の気持ちについて次のような意見や感想を述べ合いました。最も適切な発言をしているのは誰か。次のA～Eから一つ選び、記号で答えなさい。

A 好恵を誕生会からしめ出すと決めてから毎日緊張の連続だったから、この時は解放感いっぱいでも好恵の元に走って行った様子がここによく表現されているんだと思う。

B 何もかも春子の言うとおりにしか動けない紀子が、初めて自分の意思で動いた瞬間だね。ずっと気になっていたけど、春子達の視線が怖くて何もできなかったものね。

A そうだね。紀子は周りの視線ばかり気になって、なかなか自分からは行動できない子だったもんね。

C 紀子は、こんなにも小心者だったとは、と自分でも驚くくらい、誕生会のことを気にして生活していたね。誕生会が終わればその罪悪感から解放されると思っていたのにそうではなかった。ずっと気になっていた好恵が来たと知って体が自然に動いてしまった感じだね。

D きっと、好恵に謝りたい一心で行動してしまったんだと思うよ。いつもなら幸せを二〇パーセント感じられるはずの誕生日が楽しめず、甘いケーキも苦い後味ばかりが残った、って思うところに、紀子の優しさが表れているよね。

E 好恵の次の誕生日でなかったら例年通りの楽しい誕生日の一日を過ごしていたはず、ついていない、と紀子は言っているけれどDの言うことは本当にそうかな。

C 好恵の次に誕生日を迎えた紀子だったからこそ、自分の楽しさだけでなく、誕生会を開いてもらえなかった好恵のことに對して考えを巡らし、思いやることもできたんだと思うよ。

E 好恵のことがあったからこそ、自分の誕生日の有り難さを噛み締められたんだと思う。普通だと思っていたことが味わえなかった好恵に對して復讐をすると決めた日から、後悔し続けていたものね。

B 須田さん並みに豪華なプレゼントをもらって、嬉しさと申し訳なさがこみ上げてきたんだろうと思うよ。「自転車は私を好恵の家へ運んだ。」というスピード感のある表現にその気持ちがよく表れているよね。

D 今まで好恵に対して抱いていた鬱屈したジェラシーや憎悪は、復讐という形で満たされたけれど、この経験は紀子の心の成長に大きな影響を与えたと思うよ。

問一	①
問二	②
問三	③
問四	④
問五	⑤

問二	
----	--

問三	
問四	
問五	

問六	
問七	
問八	

問九	
問十	

問十一	
-----	--

問一	a
問二	b
問三	んだ
問四	c
問五	り
問六	d
問七	っ

問二	①
問三	②
問四	⑬

問三	
----	--

問四	
問五	
問六	

問七	
----	--

問八	A
問九	B
問十	C

問九	
問十	

問十一	
問十二	
問十三	

問十四	
問十五	

↓ここにシールを貼ってください↓

--

